

九州産業考古学会報



第9号 2007年11月10日発行 発行元：九州産業考古学会

熊本産業遺産研究会の活動

幸田亮一（熊本学園大学）



熊本産業遺産研究会が生まれたきっかけは、JR 熊本駅の南東部に隣接した月星化成熊本工場の閉鎖・解体であった。この工場のルーツは明治 27（1894）年に誕生した熊本紡績の赤れんが工場であり、塵突（じんとつ）から動力室、作業室に至るまで完全な形で明治 20 年代の紡績工場の姿を留めていた。そこで、この遺産をなんとか保存・活用する道はないものかと、熊本まちなみトラストが中心になって見学会や保存運動を行い、県や市、さらには国土交通省九州地方整備局にも出かけて、この工場建物の意義を語り、保存を訴えた。だが、電気室と診療所がそれぞれ別の場所に移

築されて新たな歴史を歩みはじめたのを除くと、鋸屋根を持った広大な赤れんが工場は 2003 年に消失してしまった。

保存運動の最中に、産業考古学会から玉川寛治理事（現会長）が駆けつけ応援して下さったこともあって、保存運動に関わってきた人たちから、熊本にも研究会をつくろうとの気運が盛り上がり、2003 年 3 月 3 日に、松本晋一会長、幸田事務局長という形で熊本産業遺産研究会が生まれた。

発動機愛好家から鉄道・乗物ファン、主婦、学生、会社員、大学教員、エンジニアなどの多様な会員 30 名（2007 年現在）から成る研究会は、年に数回の見学会・研究会を続けてきており、これまで、JR 肥薩線や肥薩おれんじ鉄道、三池炭鉱、山鹿、八代など、県内各地を訪ねてきた。保存運動としては、JR 上熊本駅舎の保存運動に他の団体とともに加わってきた。

見学会では、多様なメンバーのおかげで、思いがけない話を聞いたり、技術的に詳しい知識を得たりすることが多い。発動機愛好家や鉄道ファンからは長年の経験に基づく具体的な話を聞くことができるし、若手からはインターネットの衛星写真を用いて産業遺産を調べる面白い方法を学ぶことができる。

私たちは、今後、九州の中央に位置するという地形的な強みを活かしながら、産業考古学会、九州産業考古学会ともさらに連携を強めながら、産業遺産のおもしろさや価値を、熊本県民を中心に九州人に伝えていきたいと思っている。

【短信】

門司赤煉瓦ブレイス（旧サッポロビール九州工場）国登録文化財へ

竹中康二（特定非営利活動法人門司赤煉瓦倶楽部事務局長）

3月16日、門司赤煉瓦ブレイス内にある私たちの事務所にひとつの朗報が飛び込んできました。私たち門司赤煉瓦倶楽部が管理する門司赤煉瓦ブレイス内の4つの赤煉瓦建物すべてが国の登録有形文化財への登録の答申がなされるとの連絡です。ある程度分かっていたこととはいえ、現実のものとなるとその喜びは大きく、これで全国大会へ向けての準備にも弾みがつくというものです。当日は目新しい登録の認証パネルをみなさまにお披露目することができるものと思い、今から待ち遠しく思っております。

ここ北九州市は、御存知の通り産炭地筑豊を内陸に抱え、地理的にもアジアに近く、関門海峡という交通の拠点であることなどを背景として、1901年操業が開始された官営八幡製鉄所、若松の石炭積出港、門司港の交易港等、日本における近代化産業の発祥の地であるといえます。ゆえに、いまだ多くの近代化の遺跡とも言える建物が残存します。

しかし重要文化財、登録文化財となると、その数は決して多くはなく、この門司赤煉瓦ブレイスの建物は北九州市の中ではようやく4箇所目（件数としては5件目）の登録になります。この少なさのゆえんは、それらの各施設が、まだ現役で稼働していることが多いことや、行政もさほど積極的でなかったこと、また市民もその価値を見出せていないこと等が要因と思われますが、今回の門司赤煉瓦ブレイスの登録申請に象徴されるように、ようやくそういったものを見直そうという雰囲気になってきたと言えるでしょう。また、北九州市内だけではなく九州全域で見ても長崎県の軍艦島や鹿児島島尚古集成館、大牟田荒尾の三井三池炭鉱跡など九州各地に残存する産業遺産を保存・活用しようとする各団体で組織

された「九州伝承遺産ネットワーク」という連絡協議会を中心に、これらの九州の産業遺産群を「世界遺産」に登録しようという動きがあり、門司赤煉瓦倶楽部もそのネットワークに加盟して、この北九州は門司に残る赤煉瓦建物の価値を高め広く市民に知っていただくよう努力しております。

今回行われる赤煉瓦ネットワーク2007全国大会（産業考古学会全国大会との共催事業）では、往時の活況を呈した近代化の息吹を感じ取っていただけるような見学コースを用意いたしました。その古さを活かした近隣の人気の観光地門司港レトロや、海峡を挟んで数多くの日本史の舞台となった下関に残る煉瓦建物もルートに加え、皆様をお迎えしたいと思っております。今回のツアーに参加できなかった方も、もし機会がございましたら、私どもの赤煉瓦建築群に是非一度足をお運び下さい。



写真 門司赤煉瓦ブレイスの煉瓦造建築群



【短信】

2007 長崎居留地まつり「居留地シンポジウム」に参加して

西村博道（特定非営利活動法人北九州COSMOSクラブ会長）

9月29日、例年ならば秋風さわやかな季節のところ、猛暑日の続く中で「居留地シンポジウム」が開催された。会場は「活水女子大学 大チャペル」で、普段はなかなか寄りつきがたい雰囲気があり、訪ねる機会を得なかったので興味津々出かけた。長崎駅からタクシーではなく、心地の良い市内電車に乗り、ここで最初の長崎らしさを味わい、中華街で2番目の長崎を味わい、「街さるき」（歩き）をしながら大チャペルを目指した。オランダ坂の石畳を登り憧れの大チャペルの前に立つと、その清楚なたたずまいに暫く見とれ、開始時間直前に会場の中に入った。

外観と同様に中も華美な装飾はないが、均整の取れた木造トラスで構成される大チャペル、敬虔な気持ちでシンポジウムに参加できる空間である。「九州・山口の近代化遺産群と長崎の再生」のシンポジウムにふさわしい、最適な会場であった。

宗田好史京都府立大学准教授がスライドを交えて行った「九州・山口の近代化遺産の世界的価値」についての基調講演からシンポジウムは始まった。加藤康子氏がコーディネーターをするパネルディスカッションは、野村興児・萩市長、佐野透・釜石市副市長、横川清・三菱重工長崎造船所史料館長、島津公保・島津興業副会長、須田寛・全国産業観光推進協議会副会長がパネリストに、スチュアート・スミス氏をゲストに迎え行われた。萩・釜石での産業遺産の現状、三菱・薩摩が果たした日本の近代化、九州・山口の産業遺産広域連携と長崎の再生等についての報告や討議があり、熱い議論に時間をオーバーする濃い内容であった。

シンポジウムの第2部で、ブライアン・バーフガフニ長崎総合科学大学教授から、「霧笛

の長崎・居留地」と題し、長崎居留地の生い立ちと日本の近代化に携わったグラバーを始めとする関係者の業績についての講演が行われた。

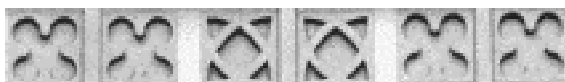
講演に引き続き、梅元建治長崎居留地まつり事務局長がコーディネーターとなって、パネラーにブライアン・バーフガフニ氏、田上富久・長崎市長、桐野耕一・長崎居留地まつり実行委員会委員長、三藤俊雄・摂南大学教授をパネリストとするディスカッションが行われた。これも会場からの質疑参加で時間を大幅に超過するという充実したシンポジウムであった。

シンポジウムのあと、長崎を歩き、大浦天主堂前オランダ坂で「アリアの夕べ in 居留地」を見たあと帰路についた。

私の所属する北九州COSMOSクラブの当面の課題である折尾駅舎と三宜楼の保存と活用を考える上で大きなヒントをお土産にもらった貴重なシンポジウムであった。



写真 シンポ会場の活水女子大学大講堂



【遺産短信】

今号より九州内の産業遺産に関連する情報を【遺産短信】と題し、編集部より逐次報告する。このコーナーでは、会員からの情報提供を歓迎するので、積極的に投稿いただきたい。

志免豎坑櫓国有形文化財に登録

会報創刊号の報告「志免産業遺産講演会」や第2号報告「志免豎坑櫓とまちづくりシンポジウム」等でたびたび紹介した旧国鉄志免豎坑櫓（福岡県糟屋郡志免町）が、町によって「見守り保存」することが決定されたことは、既にご存じの方も多いと思うが、2007年8月13日付の官報で、同櫓の国有形文化財への登録が正式に告示された。この保存活動には当学会も積極的に関わってきただけに感慨深いものがある。県内では他に旧サッポロビール九州工場の煉瓦造建造物群4件が同時に文化財登録された（本号2ページ参照）。

なお今年も11月3日に「文化財ウォーク」の一環で、恒例化した旧志免鋳業所の近代化遺産を散策するイベントが行われ、好評を博したようだ。



写真 国文化財に登録された志免豎坑櫓



写真 今は無き長崎刑務所舎房棟

長崎刑務所保存問題顛末記

「明治の五大監獄」として建てられ、また赤煉瓦造りの壮麗な建造物群としても大変貴重な遺産であった旧長崎刑務所（長崎県諫早市）が逐次解体撤去されている。

同所は平成4年に新築移転（同市内）した後、旧施設の利用方法も決まらないまま15年間放置された。その間施設の老朽化は進み、周辺家屋のシロアリ被害が問題視されるに及び、敷地は民間業者に売却され、順次解体撤去されることになった。

今年5月と6月には解体前の一般見学会が開かれた。これを機に地元有識者を中心として保存の動きが起こった。8月31日には「旧長崎刑務所の保存と活用を考える市民フォーラム」が開催され、また写真展も行われるなど保存への機運が活発化するも、大勢を変えろには至らず、解体が進んでいる。

年内には解体工事が完了する。施設跡地の用途については未定だが、ショッピングセンターの建設が有望視されているという。民間所有者により旧刑務所正門の保存が検討されていると先日報じられたが、これについてはまだ不透明な現状であることを付け加えておく。

【報告】

2007 年度総会および見学会

砂場一明（小会会員）

九州産業考古学会 2007 年度総会は、7 月 21 日に北九州市の折尾で開催された。総会に先立ち行われた恒例の見学会は「折尾駅と周辺の鉄道遺産」と題して、鉄道史学会の大塚孝氏に案内を戴き、一般見学者を含め約 30 名が参加した。

大正ロマン漂う風格ある駅舎を持つ折尾駅構内には、重厚な赤煉瓦造りの地下旅客通路や御影石の階段、ホーム上屋支柱に使用されている外国産レール等々、日本初の立体交差駅に相応しく贅沢な構造物が随所にみられる。

鉄道と共に発展してきた折尾の街には多くの鉄道関連遺構があり興味深い。雑草に覆われた堤防状のものは、鹿児島本線から筑豊本線若松方面への運炭用接続線として建設された築堤跡であり、旧三好炭鉱エンドレス線の巨大な橋脚、九州鉄道開業当時のものと思われる下駄歯構造の JR アーチ橋梁、これと並列した旧日本炭鉱専用鉄道のコンクリート橋台等が現存している。その傍らでは平成 31 年度完成を目指す「折尾駅付近高架化工事」が着々と進行していた。

東側に周ると、平成 12 年（2000）に廃止された西日本鉄道北九州線の終端ターミナルであった折尾電停の二連・三連アーチ煉瓦架道橋が残されており、中でも国内最大級といわれる「ねじりまんぼ」工法の架道トンネル内は何度見ても美しい。しかし北九州市が構想する「折尾地区総合整備事業」の具体化によって、折尾駅舎を始め、これらの貴重な鉄道遺産は消滅の危機に直面している。

現地見学会に引き続き、総会では大塚氏の講演と会員による 3 件の調査報告等がなされ、次に 11 月に予定されている産業考古学会全国大会について清水憲一実行委員長から

準備状況報告があった。最後に「JR 折尾駅保存要望書」を北九州市長宛てに提出することも満場一致で了承され、全国大会北九州開催年となる今年の年次総会は盛大裡に終了した。（要望書は 9 月 4 日に提出された。）



写真 盛況を博した見学会（折尾駅）

尚、当日は直方石炭記念館の開館 36 周年記念として、救護練習坑道が閉鎖後 39 年ぶりに特別公開されるという日でもあったため、プレングレスツアーの名目で、有志は早朝から直方市へも足を運んでいる。

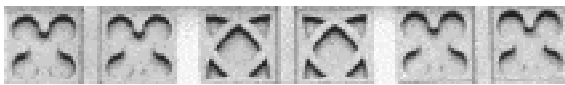
同館は明治 45 年（1912）に、炭鉱事故救護隊員を養成するため作られた直方救護練習所の施設で、水平坑と斜坑の模擬坑道は全長 117 メートルにも及ぶといわれているが、老朽化が激しい。このため今回の公開部分もごく一部に限られたが、坑内の雰囲気は実感できた。類例の少ない極めて貴重なもので、後世に残したい産業遺産である。

石炭記念館の眼下には、昭和 40 年代まで石炭輸送の要として活躍していた広大な JR 直方機関区と、初代博多駅の部材を移築したと伝えられる直方駅が展望できる。炭都の駅

として栄華を誇ったこの駅舎も、改築のため解体される運命にあるという。



写真 公開された直方救護練習所模擬坑道



【お知らせ】

『福岡の近代化遺産』まもなく刊行

前号で触れた、小会がメンバー挙げて取り組んでいる出版企画『福岡の近代化遺産』が年内にも刊行される予定だ。

今企画では、会長木元を編集代表として会報編集部が全面的に企画に携わった。全 200 頁程度で、福岡市を中心とする都市圏全体を対象として、掲載候補の中から約 300 件の一覧表と 57 件の詳細解説項目を掲載している。価格は現段階では未定だが、北九州地域のメンバーが中心となって編纂した『北九州の近代化遺産』より若干お手頃な価格になりそうだ。詳しくは今号に折り込みの書籍紹介チラシをご参照いただきたい。



【お知らせ】

シンポジウム 「肥薩線 100 年の歴史と産業遺産を語る」

期日：2007 年 12 月 1 日（土）13:30 ～

会場：山江村農村環境改善センター

（熊本県球磨郡山江村山田甲 1356-1）

* 基調講演：「現在の鉄道産業遺産を考える」
青木栄一（東京学芸大学名誉教授）

* ミニトーク：

「九州の鉄道発展と肥薩線」

幸田亮一（熊本学園大学教授）

「産業遺産を楽しむ」

砂田光紀（OFFICE FIELDNOTE 代表）

「100 周年に向けた取り組み」

* その後、フリーディスカッション、

* 懇親会有り

〔問合せ先〕肥薩線開通 100 周年記念事業実行委員会事務局（0966-24-4111〔内線 334〕）



皆様の声を募集！

九州産業考古学会では、「皆様の声」を募集しています。多くの方々による率直な感想が何よりの励みになり、今後の活動への推進力へと繋げることができます。

会報を読んでみての感想文、関連する学会の活動、身近な産業遺産について、またはイベント紹介など、何でも結構ですので、メール・FAX で投稿して下さい。

投稿された文章は会報に掲載する場合がありますので、氏名掲載の可否、また今後学会情報をお送りすることへの可否も併せてご記入いただければ幸いです。

連絡先は会報末尾の事務局をご参照下さい。当学会サイトへの投稿も歓迎します。

【お知らせ】

折尾駅舎保存署名活動について

福山ミツア（折尾駅の歴史的価値を考える会代表）

九州産業考古学会総会で見学会が行われた折尾の街は、JR鹿児島本線と同筑豊本線が交差する折尾駅を中心に、交通・産業・文化の地域拠点として繁栄してきました。

石炭輸送によって日本の近代化に大きく貢献した折尾駅の駅舎は、重要な歴史的遺産です。ところが、折尾駅は平成31年完成を目標としている「折尾地区総合整備事業」に伴って、来年度末にも解体される危険性が高くなっています。折尾駅の扱いについては開発事業の調整を目的とする公的機関「おりお未来21協議会」でも審議が続いていますが、このたび私ども「折尾駅の歴史的価値を考える会」では、駅舎保存を求める署名活動を開始いたしました。

折尾の再開発は、単に交通の流れや生活を便利にしていくという視点からだけの街づくりではなく、折尾に暮らす私たちの過去を振り返り、それを活力に未来へ踏み出していくような折尾が折尾であるためのまちづくりであって欲しいと願います。折尾駅舎を取り壊すことは、北九州地域の「来し方」の証人を消し去ってしまうものです。

折尾駅周辺にある主な歴史的遺産は次に挙げるとおりです。

折尾駅舎は、大正5年建築の90年を超える木造2階建の駅舎で、かつ日本初の立体交差駅です。待合室には木の丸椅子があり、高架下には赤煉瓦通路トンネルなどがあります。「訪れるべき価値のある駅」の全国第7位にも選ばれています（「日本経済新聞」参照）。

駅前を運河が流れるというのは全国でここだけです。この堀川運河は、江戸時代以来189年の歳月をかけて岩を砕き掘られたもので、明治時代には筑豊の上質な石炭を運んで

日本の産業近代化に寄与しました。車返の地にある切貫きのノミ跡は250年前の姿を現在に残しています。

すぐ近くの西鉄北九州線折尾電停跡についても、高架橋で2連+3連の赤煉瓦トンネルが現存しており、特にその内の一つのアーチの煉瓦積み部分がねじれた「ねじりまんぼ」構造は現存する中で日本最大級のもので、

以上のように、折尾駅は折尾の住人にとっての誇りであり、シンボルであり、地域の絆の要です。のみならず、全国的にも後世に残すべき、日本の重要な歴史的遺産ではないでしょうか。

このような歴史的遺産である折尾駅舎を保存し活用し、「歴史漂う水辺と憩いのまちづくり」を実現しましょう!!

駅舎の取壊し予定日限までに、残された時間は多くありません。北九州市とJR九州に提出する署名にご協力下さいますよう、よろしく願い申し上げます。また、ひとりでも多くの方に署名の呼びかけをして頂けると幸いです。

【編集部・注】

九州産業考古学会では9月4日に北九州市長宛に折尾駅舎の保存要望書を提出しており、駅舎の保存に向けた運動にはこれまで積極的に関与している。そのことはメディアでも取り上げられている。なお署名については小会サイト（ホームページ）からも署名用紙をダウンロードできるので併せて確認いただきたい。

会報第9号・目次

| | |
|---|--|
| 【巻頭言】 | 【報告】 |
| 熊本産業遺産研究会の活動紹介幸田亮一 1 | 2007 年度総会および見学会砂場一明 5 |
| 【短信】 | 【お知らせ】 |
| 門司赤煉瓦プレイス（旧サッポロビール九州 工場）国登録文化財へ竹中康二 2 | 『福岡の近代化遺産』まもなく刊行..... 6 |
| 2007 長崎居留地まつり「居留地シンポジ ウム」に参加して西村博道 3 | シンポジウム「肥薩線100年の歴史と産業 遺産を語る」 6 |
| 【遺産短信】 | 皆様の声を募集！ 6 |
| ・志免壱坑櫓国有形文化財に登録 4 | 折尾駅舎保存署名活動について福山ミツエ 7 |
| ・長崎刑務所保存問題顛末記..... 4 | 今後の予定 8 |

（お知らせ内の各イベントは、頁末の当会ウェブサイトからもご確認ください）

今後の予定

| 月・日 | 活動内容 |
|-------|-----------------------------|
| 12月1日 | 肥薩線100年シンポジウム （山江村） |
| 12月2日 | 九州伝承遺産ネットワークシ ンポジウム（佐賀市） |
| 12月中旬 | 『福岡の近代化遺産』刊行 |
| 1月 | 新年会（会場未定） |
| 2月3日 | 田川シンポジウム（仮称） |
| 2月下旬 | 会報第10号発行 |

【予定は都合により変更する事があります】

<編集後記>

前にも記したとおり、『福岡の近代化遺産』出版企画の事務全般を行ってきたことに加え、産業考古学会全国大会の準備もあり、今年は特に忙しく、今号は本来発行予定にはなかったが、全国大会を機会に小会の活動も少しでも知って頂きたいという思いから急遽発刊した。時間も限られた中、地元で地道な活動を行っている方々から多くの原稿が寄せられたことに、「北九州」の地力をつくづく感じさせられた。本報を機会に小会に興味を持って頂けたら、これ以上の幸せはない。（市原）

会費納入・ご寄付のお願い

当会は事務局体制や会報を充実させるため、会則により年会費を個人会員 2000 円、団体会員は 5000 円徴収させて頂く事になりました。産業考古学発展のため、非会員へも送付する方針は維持しますが、当会の趣旨をご理解頂き、会費納入或いはご寄付についてどうぞ宜しく願います。

会費納入・寄付先口座【郵便口座】

17430-88882241

キュウシュウサンギョウコウコガツカイ

九州産業考古学会事務局 〒 807-0022 福岡県遠賀郡水巻町頃末北4丁目 11-7-204 青地学 気付

TEL&FAX : 093-202-5054 E-mail : aochimanabu@yahoo.co.jp

URL : <http://f17.aaa.livedoor.jp/~heritage/>